

# 小学校国語科教材「くじらぐも」(中川李枝子作)の 親しみやすさ・わかりやすさ・おもしろさ

高原 佳江

Familiarity, Clarity and Attraction of “Kujiragumo” (by Rieko Nakagawa)  
as Teaching Material for Japanese Language Classes at Elementary Schools

TAKAHARA Yoshie

**Abstract:** “Kujiragumo” by Rieko Nakagawa has been included in Japanese language textbooks (published by Mitsumura Tosho Publishing Co., Ltd.) used at elementary schools since 1971. The purpose of this paper is to examine the process of creation of “Kujiragumo” based on Rieko Nakagawa’s descriptions, and to examine the attractiveness of “Kujiragumo” by analyzing the words, sentences and story. Rieko Nakagawa was offered a commission for preparation of teaching material for Japanese language classes in the first grade at elementary schools. Her investigation of the requirements for the first grade resulted in creation of “Kujiragumo” as a familiar, straightforward and interesting story.

**Key Words:** “Kujiragumo”, Rieko Nakagawa, teaching material for Japanese language classes at elementary schools

**要旨:** 「くじらぐも」は、中川李枝子による作品で、1971(昭和46)年から光村図書出版株式会社の小学校国語科教科用図書に掲載されている。本稿では、まず、中川李枝子の著書を主な一次資料として検討することによって、「くじらぐも」の創作過程を明らかにすることを試みた。次に、「くじらぐも」の言葉・文章及び物語を分析し考察することによって、「くじらぐも」の魅力を明らかにすることを試みた。中川李枝子は、幼い子ども向けの童話や絵本を創作していたが、小学1年生の国語科教材の依頼を受け、小学1年生について徹底的に研究して「くじらぐも」を完成させた。「くじらぐも」の魅力は、主に親しみやすいこと、わかりやすいこと及びおもしろいことであると考えられる。

**キーワード:** 「くじらぐも」、中川李枝子、小学校国語科教材

## 1. はじめに

「くじらぐも」は、中川李枝子(1935-)による、小学校国語科教科用図書のための書き下ろしである。

「くじらぐも」は、小学校入学前の幼い子ども向けの童話や絵本を創作していた中川がはじめて小学生向けに書いた作品であった<sup>1</sup>。1971(昭和46)年に『しょうがく しんこくご 一年下』(光村図書出版)に掲載されて以来、現在まで光村図書出版株式会社の小学校国語科教科用図書に掲載されている<sup>2</sup>。幼い子ども向けの童話や絵本を創作していた中川は、なぜ小学生向けの作品を書くことになり、どのようにその作品を完成させたのか。また、小学校国語科教科用図書に50年以上にわたり掲載され読み続けられている「くじらぐも」の魅力は何であるのか。

「くじらぐも」に関する研究としては、小学1年生の国語科授業実践研究が多い。近年では、例えば、「くじらぐも」を用いて言葉や挿絵から想像を膨らませることを楽しむ授業や、人間の本質的な願いについて考える授業の実践研究が見られる<sup>3</sup>。これらのなかには、「くじらぐも」を教材として研究し、指導方法を研究する内容を含むものもある。実践研究、また、教材研究や指導法研究は、いずれも重要なものである。

これらの先行研究に対して、筆者は、素材として研究することも重要であると考えため、また、中川李枝子作品のひとつとして興味があるため、中川が「くじらぐも」を創作する過程を見た後、「くじらぐも」そのものと正対し、「くじらぐも」を追究することとする。

本稿の目的は、「くじらぐも」の創作過程及び「くじらぐも」の魅力を明らかにすることである。以下、まず、中川の著書を主な一次資料とし、中川が「くじらぐも」について書き表した文章を対象として、「くじらぐも」の創作過程を検討することからはじめる。次に、「くじらぐも」の言葉・文章及び物語<sup>4</sup>を分析して、「くじらぐも」の魅力について考察する。

## 2. 「くじらぐも」の創作過程

中川李枝子は、1956(昭和31)年にみどり保育園の主任保母となり、幼い子どもたちを喜ばせるために幼年童話や絵本を創作していた。例えば、1962(昭和37)年に幼年童話『いやいやえん』(大村百合子絵、子どもの本研究会編)、1964(昭和39)年に幼年童話『かえるのエルタ』(大村百合子絵、子どもの本研究会編)、1965(昭和40)年に幼年童話『ももいろのきりん』(中川宗弥絵)、1967(昭和42)年に絵本『ぐりとぐら』(大村百合子絵)と絵本『そらいろのたね』(大村百合子絵)が、株式会社福音館書店から刊行されている。

中川が小学生向けの作品を書くきっかけとなったのは、光村図書出版株式会社の小学校国語教科用図書の編纂に携わっていた石森延男(1897-1987)が中川に「文字を習った子どもが読む楽しさを覚えるようなものを書いてください<sup>5</sup>」と小学1年生の国語科教材の依頼をしたことであった。中川は、「自分の領分は小学校入学前まで<sup>6</sup>」と決めていたが、最終的にこの依頼を引き受ける。

中川は、保母をしていたため幼児についてはよく知っていたが、小学生については詳しくない。そのため、まず、依頼された国語科教材の読み手となる小学1年生についてできるだけ多くの情報を集めた。

保育園の子どもたちと学校のまわりをお散歩したり、息子の参観日には学校中を見学させてもらいました。小学生向けの学習雑誌を出している出版社の編集者に頼み、先生たちのレポートを集め、小学校教諭経験のある児童文化研究家・吉岡たすくさんの評論を読むなど、徹底的に1年生関連の資料にあたりました。<sup>7</sup>

このようにして、中川は小学1年生について徹底的に研究し、小学1年生像を作り上げた。そして、日本全国の小学1年生が読むことから、中川はおもしろいこと、男の子と女の子を公平に扱うこと、地域や気候が偏らないことを条件とすることとした<sup>8</sup>。

中川は、自分の子ども時代の戦争経験ももとにした。

舞台を校庭にしたのは、私の経験からです。戦争中、私は転校を繰り返して4つの小学校に通いました。それぞれの学校に共通する場所は、校庭でした。疎開した札幌では、空を見上げて、「雲に乗って別れた先生や友だちのところへ会いに行きたい」と想像していました。クジラにしたのは、父がクジラやゾウなど、大きなものが好きだったから。それで、体育の時間にくじらぐもに乗って空を飛ぶ話になりました。

校庭でのびのび体育ができるのは、平和の象徴です。いつ空襲がくるか分からない戦争中は、できなかったのですから。<sup>9</sup>

各小学校の共通点である校庭、また、どこへでも繋がっている空を舞台とし、いつでもどこでも見上げるとそこにある雲を題材とすることとしたのであった。戦争がなく平和であれば、子どもたちは空の下で伸び伸びと体を動かすことができる。中川は、平和への願いも込めて、体育の時間に校庭の空にくじらの形をした雲が浮かび、

その雲に乗って子どもたちが空を飛ぶ物語を構想した。

構想を固めると、続いて中川は言葉について考えた。

それと一年生は必ず音読がありますから、発音し易いことばを選ぶということにも配慮しました。一年生ですと4月生まれと3月生まれでは相当差がありますから、舌の回る子も回りにくい子もいるわけです。

もっとも工夫をしたのは、“ことばを効率よく、効果的に使う”ということです。400字4枚の枠があり、一字一句、無駄にはできないのです。<sup>10</sup>

中川は、音読も視野に入れ、あらゆる小学1年生がつかえたり引っ掛かったりすることがなく、気持ちよく読むことができるように言葉を吟味して選び、それぞれの力が十分に発揮されるように言葉を配置した。石森の依頼からおおよそ1年後、400字詰め原稿用紙4枚の「くじらぐも」を完成させた。「くじらぐも」は、1971（昭和46）年に『しょうがく しんこくご 一年下』（光村図書出版）において発表された。

現在、「くじらぐも」は、『こくご 一下 ともだち』（光村図書出版、2020）の4ページから13ページに掲載されている。

### 3. 「くじらぐも」の親しみやすさ

「くじらぐも」は、4時間目に1年2組の子どもたちが体操をしていると空に雲のくじらが現れ、その雲に乗って子どもたちと先生が空を旅する物語である。

物語は「四じかんめの ことです。/「一ねん二くみの 子どもたちが たいそうを して いると、空に、大きな くじらが あらわれました。まっしろい くもの くじらです。」（p.4 II.1-5）<sup>12</sup>ではじまり、はじめにいつ、どこで、誰が、何をしているのかが紹介される。「くじらぐも」は4時間目を描いている。体操をしていると空に雲が現れるという描写があることから、校庭（運動場）で体育の授業が行われていることが読み取れる。1年2組の子どもたちは、中川が研究した「くじらぐも」の読み手と同じ小学1年生である。読み手と同じく男の子も女の子もいる。読み手の日常会話がそのまま物語に取り入れられてもいる。子どもたちが通う小学校がある地域などは特定されていない。読み手は物語で描かれる4時間目や体育の時間を経験したことがあり、また、子どもたちの姿や学校の様子は読み手の姿や学校の様子と重なる部分が多く、読み手は子どもたちを身近に感じることができると推測される。

4時間目の1年2組の体育の時間という身近な現実から空想の世界へと移行するが、冒頭の「大きな くじらが あらわれました。」（p.4 I.4）、また、末尾の「がっこうの やねが、みえて きました。」（p.12 II.7-8）と「くもの くじらは、また、げんき よく、青い 空の なかへ かえって いきました。」（p.13 II.7-10）は、子どもたちの視点で書かれている。読み手は、子どもたちと自分とを重ね合わせて、自分にも起こるかもしれない出来事として読むことができるのではないだろうか。

「くじらぐも」は、読み手が入りやすく、入るとすぐに空想の世界に溶け込んで思い切り遊ぶことができ、また現実に戻ってくることができる物語である。「くじらぐも」は親しみやすく、まずは親しみやすいことが「くじらぐも」の魅力となっていると考えられる。

### 4. 「くじらぐも」のわかりやすさ

#### (1) 起承転結の明確さ

「くじらぐも」の構成は、以下のようになっている。

##### ① 子どもたちとくじらが出会う

4時間目、1年2組の子どもたちが体操をしていると、空に大きくて真っ白い雲のくじらが現れた。くじらは、空で子どもたちの体操の真似をする。

## ② 子どもたちとくじらが話す

子どもたちとくじらが呼び掛け合い、誘い合って、男の子も女の子も雲のくじらに飛び乗ろうと張り切る。子どもたちは手を繋いで円い輪になるとジャンプし、くじらは応援する。

## ③ 子どもたちが雲のくじらに乗って空を旅する

いきなり風が吹き、あっという間に先生と子どもたちは雲のくじらに乗っていた。くじらは、青い空の中を、海の方へ、村の方へ、町の方へ元気いっぱいに進んでいく。子どもたちは歌を歌う。

## ④ 子どもたちとくじらが別れる

もう昼であるため、帰ることにする。くじらがジャングルジムの上にみんなを降ろすと、4時間目の終わりのチャイムが鳴り出した。雲のくじらは、また元気よく、青い空の中へ帰っていった。

このように、「くじらぐも」の物語は、①子どもたちとくじらが出会う、②子どもたちとくじらが話す、③子どもたちが雲のくじらに乗って空を旅する、④子どもたちとくじらが別れるという4つの要素で構成されている。「くじらぐも」では、起承転結がはっきりしているといえる。

## (2) 登場人物の呼称の使い分け

「くじらぐも」には、くじら、子どもたち、先生が登場する。

このうちくじらは、冒頭で「大きな くじら」(p.4 1.4)と表現されるため、子どもたちには空に現れたときからくじらと認識されている。冒頭以外でも、「くじら」(p.5 1.2, p.5 1.10, p.6 1.3, p.6 1.5, p.7 1.1, p.7 1.6, p.8 1.6, p.8 1.10, p.10 1.2, p.12 1.5)と表現される。その他では、「くもの くじら」(p.4 1.5, p.5 1.7, p.7 1.7-8, p.9 1.8-9, p.13 1.7), 「くじらぐも」(p.12 1.9)と表現される。とりわけ雲であることを強調するときには、「くもの くじら」と「くじらぐも」が使用されていると推測される。

子どもたちは、冒頭で「一ねん二くみの 子どもたち」(p.4 1.2)と表現される。冒頭以外でも、「子どもたち」(p.9 1.7)と表現される。その他では、「みんな」(p.5 1.5, p.6 1.7, p.7 1.4, p.8 1.1, p.9 1.4, p.11 1.1, p.12 1.10, p.13 1.2), 「男の子も、女の子も」(p.7 1.9)と表現される。通常「子どもたち」と「みんな」が使用され、とりわけその場にいるすべての子どもたちであることを強調するときには「男の子も、女の子も」が使用されていると推測される。

「くじらぐも」では、場面によって登場人物の呼称が使い分けられており、登場人物の様子を想像しやすいようになっている。

## (3) 登場人物の行動と関係の明示

子どもたちが体操をしていると、空に現われたくじらも体操をはじめ。この行動以降の子どもたちとくじらの行動は、以下のようである。

- ・ 一ねん二くみの 子どもたちが たいそうを して いると、(p.4 1.2-3)  
⇒くじらも、たいそうを はじめました。(p.5 1.2)
- ・ みんなが かけあしで うんどうじょうを まわると、(p.5 1.5-6)  
⇒くもの くじらも、空を まわりました。(p.5 1.7)
- ・ せんせいが ふえを ふいて、とまれの あいずを すると、(p.5 1.8-9)  
⇒くじらも とまりました。(p.5 1.10)
- ・ 「まわれ、みぎ。」せんせいが ごうれいを かけると、(p.6 1.1-3)  
⇒くじらも、空で まわれみぎを しました。(p.6 1.3-4)

このうち「せんせいが ふえを ふいて、とまれの あいずを すると、」(p.5 1.8-9)の裏には「みんなが とまると、」があり、「『まわれ、みぎ。』せんせいが ごうれいを かけると、」(p.6 1.1-3)の裏には「みんなが まわれみぎを すると、」がある。いずれにおいても、子どもたちが主体となり、「子どもたち(みんな)が ○○すると、くじら(くもの くじら)も ○○しました。」という表現が繰り返し使用されている。この表現か

ら、くじらが子どもたちの行動をよく見てその真似をしていることがわかる。また、この表現の繰り返しから、繰り返し真似をするくじらのユーモラスな姿が浮かび上がってくる。さらに、この表現の繰り返しから、子どもたちとくじらが一体化していく様子を捉えることができる。

この後、子どもたちが雲のくじらに飛び乗ろうとするときには、くじらが主体となり、「もっと たかく。もっと たかく。」(p.8 1.5, p.8 1.9)と子どもたちを応援して、子どもたちがジャンプする。子どもたちが雲のくじらに乗って空を旅するときと、子どもたちとくじらが別れるときには、子どもたちとくじらの両方が主体となる。くじらは空の中を進み、みんなは歌を歌い、雲のくじらはジャングルジムの上にみんなを降ろして空の中へ帰っていくのである。

「くじらぐも」では、子どもたちとくじらの行動並びに子どもたちとくじらの関係がはっきり示されている。

(1) 起承転結の明確さ、(2) 登場人物の呼称の使い分け、(3) 登場人物の行動と関係の明示から「くじらぐも」はわかりやすく、わかりやすいことが「くじらぐも」の魅力のひとつとなっていると考えられる。くじらが登場することで物語は広がりを見せるが、「くじらぐも」は無駄な描写や叙述を含むこともなく、明快である。

## 5. 「くじらぐも」のおもしろさ

### (1) 登場人物の会話と気持ちの高まり

くじらが空で子どもたちの体操の真似をした後、「みんなは、大きな こえで、『おうい。』と よびました。／『おうい。』と、くじらも こたえました。」(p.6 1.7-p.7 1.2)と呼び掛け合う。また、「『ここへ おいでよう。』みんなが さそうと、『ここへ おいでよう。』と、くじらも さそいました。」(p.7 11.3-6)と誘い合う。このときのくじらは、それまでのように単に子どもたちの真似をしているのではない。子どもたちの話を聞き、さらに、自分も子どもたちに話している。子どもたちとくじらの発話とその発話に対する応答の繰り返しによって、一緒に遊びたいという気持ちが表現される。

続く文章は、「『よし きた。くもの くじらに とびのろう。』／男の子も、女の子も、はりきりました。」(p.7 11.7-10)である。その場にいるすべての子どもたちがくじらの発話に対して積極的に応答して雲のくじらに飛び乗りたいと張り切り、一緒に遊びたいという気持ちの高まりが表される。

雲のくじらに飛び乗るために、「みんなは、手を つないで、まるい わに なる」(p.8 1.1)。子どもたちは「『天まで とどけ、一、二、三。』」(p.8 1.2)と声を出してジャンプするが、「やっと 三十センチぐらい」(p.8 11.3-4)であり、くじらが「『もっと たかく。もっと たかく。』」(p.8 1.5)と応援する。子どもたちはもう一度「『天まで とどけ、一、二、三。』」(p.8 1.7)と声を出してジャンプするが、「こんどは、五十センチぐらい」(p.8 1.8)であり、くじらがもう一度「『もっと たかく。もっと たかく。』」(p.8 1.9)と応援する。子どもたちはさらにもう一度「『天まで とどけ、一、二、三。』」(p.9 11.1-2)と声を出す。子どもたちの掛け声とくじらの声援は、回を重ねるにつれて力が入って、大きくなっていくことが想像できる。子どもたちの懸命な掛け声とくじらの懸命な声援の、回を重ねるにつれて大きくなっていく繰り返しから、一緒に遊びたいという気持ちのさらなる高まりが感じられる。

「くじらぐも」では、子どもたちとくじらの会話によって、読み手が自然と子どもたちとくじらの気持ちとその高まりを想像することができるようになっていく。

### (2) ドラマチックな変化

くじらは最初から最後まで空にいた。一方で、子どもたちと先生は、最初は運動場にいたが、3回目の「『天まで とどけ、一、二、三。』」(p.9 11.1-2)の後に雲のくじらの上へ移動する。

雲のくじらの上への移動については、「その ときです。／いきなり、かぜが、みんなを 空へ ふきとばしました。そして、あっと いう まに、せんせいと 子どもたちは、手を つないだ まま、くもの くじらに のって いました。」(p.9 11.3-9)と表現される。「その ときです。」(p.9 1.3)、「いきなり、かぜが」(p.9 1.4)、「そして、あっと いう まに」(p.9 1.6)という畳み掛けるような表現、さらに、「のりました。」ではなく「の

って いました。」(p.9 l.9) という表現が、子どもたちと先生がまさに一瞬のうちに雲のくじらの上へ移動していたことを伝えている。みんなで一緒に雲のくじらに飛び乗るためにみんなで手を繋いで輪になって一生懸命にジャンプする子どもたちであったからこそ、くじらは一生懸命に応援し、風も吹いたのであろう。子どもたちとくじらの努力に対して、風が協力し、ドラマチックな変化がもたらされたのであった。

結果として、呼び掛け合い誘い合っていたときには運動場と空に開いていた子どもたちとくじらの距離が、子どもたちが雲のくじらの上へ移動することで、一気に縮まることとなった。

### (3) 臨場感のある情景描写

子どもたちは、雲のくじらに乗った。くじらは、子どもたちと先生を乗せて、「『さあ、およぐぞ。』」(p.10 l.1) と青い海を連想させる青い空を泳ぐ。「くじらは、青い 青い 空の なかを、げんき いっぱい すすんで いきました。」(p.10 ll.2-5) では、「青い」が重ねられている。「青い」を重ねることで意味を強め、すなわち、空が抜けるように青く澄み切っていることを表している。くじらが子どもたちと先生を乗せて一緒に遊ぶことができる喜びから、力強く空の中を進んでいく様子が読み取れる。

続く「うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちの ほうへ。」(p.10 ll.6-8) は、前の文である「げんき いっぱい すすんで いきました。」(p.10 ll.4-5) との倒置表現であると考えられる。「うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちの ほうへ、げんき いっぱい すすんで いきました。」とするのではなく、「げんき いっぱい すすんで いきました。うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちの ほうへ。」(p.10 ll.4-8) としたことで、まず、ここでもくじらが子どもたちと先生を乗せて力強く空の中を進んでいく様子が強調される。また、子どもたちと一緒に遊ぶことができることが嬉しくて、いろいろな場所へ行ったことが伝わる。

雲のくじらに乗った子どもたちは、「みんなは、うたを うたいました。」(p.11 ll.1-2) と表現される。歌を歌うほどに、子どもたちは心地よさを感じていたと想像できる。くじらと一緒に遊ぶことが嬉しく、また、空の中を進んでいくことが心地よいのである。

続く「空は、どこまでも どこまでも つづきます。」(p.11 ll.3-5) という情景描写にも、「どこまでも」を重ねて空が果てしなく続き広がっていることを示すことによって、一緒に遊ぶことができる嬉しさと空の中を進んでいく心地よさが表されている。

子どもたちとくじらが一緒に空を旅するときに最も嬉しいと思い、最も心地よく感じていたことが明らかである。子どもたちはみんなで一生懸命にジャンプし、くじらは一生懸命に応援して、力を合わせて一緒に遊びたいという気持ちを実現させたからこそ、子どもたちとくじらは嬉しいと思い、心地よく感じた。「くじらぐも」の情景描写は、生き生きと状況を説明するものであるだけでなく、登場人物の心情を表すものである。

(1) 登場人物の会話と気持ちの高まり、(2) ドラマチックな変化、(3) 臨場感のある情景描写から「くじらぐも」はおもしろく、おもしろいことも「くじらぐも」の魅力となっていると考えられる。「くじらぐも」は、教訓や感傷を含むこともなく、描写や叙述をもとに場面の様子や登場人物の言動を想像しながら、楽しく読むことができる物語である。

## 6. おわりに

以上、本稿では、「くじらぐも」の創作過程及び「くじらぐも」の魅力を明らかにすることを試みた。中川李枝子は、幼い子ども向けの童話や絵本を創作していたが、石森延男から小学1年生が読む楽しさを覚える国語科教材の依頼を受けた。小学1年生について徹底的に研究し、子どもの気持ちを捉え子ども独特の話し方や動き方を理解して、平和への願いを込めつつ性別や地域に関係なくあらゆる子どもが楽しむことができるように考えて、「くじらぐも」を完成させた。「くじらぐも」の魅力は、主に親しみやすいこと、わかりやすいこと及びおもしろいことであると考えられる。

残された課題は、(元)小学校教諭へのインタビューを通して、「くじらぐも」の実践の内容と実践における子どもの学びの可能性を理解し、その上で「くじらぐも」の教育的価値を明らかにすることである。また、例えば、

中川の絵本『ぐりとぐら』のシリーズの魅力は主に友達と遊び、食べるという子どもにとって身近な世界をおもしろく、はっきりわかりやすく示していることと考えられ、「くじらぐも」と共通している部分があるようである。他の中川李枝子作品も分析し、中川李枝子作品に通底する魅力を明らかにすることも、今後の課題である。

#### 注・引用文献

- 1 現在小学1年生が使用している光村図書出版株式会社の小学校国語科教科用図書（令和2年度版（令和2年～使用））に掲載されている中川の作品は、「いちねんせいのうた」（『こくご 一上 かざぐるま』）、「くじらぐも」, 「ぞうさんのぼうし」（以上、『こくご 一下 ともだち』）である。過去には、「おはようっていいな」（『こくご 一上 かざぐるま』昭和61年度版（昭和61年～昭和63年使用）～昭和64年（平成元年）度版（平成元年～平成3年使用））, 「はる」（『こくご 一上 かざぐるま』平成17年度版（平成17年～平成22年使用）～平成23年度版（平成23年～平成26年使用））, 「あさ」（『こくご 一上 かざぐるま』平成27年度版（平成27年～令和元年使用））も掲載されていた。
- 2 「くじらぐも」は、昭和46年度版（昭和46年～昭和48年使用）, 昭和49年度版（昭和49年～昭和51年使用）, 昭和52年度版（昭和52年～昭和54年使用）（以上、『しょうがく しんこくご 一年下』光村図書出版）, 昭和55年度版（昭和55年～昭和57年使用）, 昭和58年度版（昭和58年～昭和60年使用）, 昭和61年度版（昭和61年～昭和63年使用）, 昭和64年（平成元年）度版（平成元年～平成3年使用）, 平成4年度版（平成4年～平成7年使用）, 平成8年度版（平成8年～平成11年使用）, 平成12年度版（平成12年～平成13年使用）, 平成14年度版（平成14年～平成16年使用）, 平成17年度版（平成17年～平成22年使用）, 平成23年度版（平成23年～平成26年使用）, 平成27年度版（平成27年～令和元年使用）, 令和2年度版（令和2年～使用）（以上、『こくご 一下 ともだち』光村図書出版）に掲載されてきた。
- 3 佐々木智子・徳永加代「子どもが言葉や挿絵から想像を膨らませることを楽しむ授業-1年生『くじらぐも』を用いて-」（『帝塚山大学教育学部紀要』第1号, 帝塚山大学教育学部, 2020, pp.98-107）, 赤穂徳郁「『響き合う関係』から人間の願いについて考える-『くじらぐも』（小学校一年生）の授業-」（『文芸教育 子どもの認識力を育てる実践理論研究誌』第118号, 新読書社, 2019, pp.51-60）などである。
- 4 「くじらぐも」には『どうぞのいす』（香山美子作, ひさかたチャイルド, 1981）などの絵で知られる絵本画家の柿本幸造（1915-98）の絵が添えられているが、本稿では中川が作った言葉・文章及び物語に注目する。
- 5 中川李枝子『中川李枝子 本と子どもが教えてくれたこと』平凡社, 2019, p.83。
- 6 中川李枝子『ママ, もっと自信をもって』日経BP社, 2016, p.91。
- 7 注6, p.92。
- 8 注6, pp.92-93。
- 9 注6, pp.93-94。
- 10 中川李枝子「『くじらぐも』ができるまで-『くじらぐも』は、自分の作品の中でも一番苦勞した作品です。」石川文子編『くじらぐもからチックタックまで』フロネーシス桜蔭社, 2008, p.15。
- 11 「/」は、改行箇所を示す（小学館辞典編集部編『句読点, 記号・符号活用辞典。』小学館, 2007, p.41）。以下同様とする。
- 12 以下, 引用はすべて『こくご 一下 ともだち』（光村図書出版, 2020）からである。そのため, 頁数と行数のみを丸括弧「( )」で括って本文に示すこととする。

#### 参考文献

- 中川李枝子「巻頭言『くじらぐも』のこと」『こどもとしょかん』第44号, 東京子ども図書館, 1990, p.1
- 中川李枝子「作者の言葉 くじらぐも」『小学校国語 学習指導書 1下 ともだち』光村図書出版, 2020, pp.48-49
- 中村栄・河井邦彦「ホットインタビュー'96 中川李枝子 空に浮かぶくじらぐもは平和のシンボル」『小一教育技術』第50巻第1号, 小学館, 1996, pp.66-69